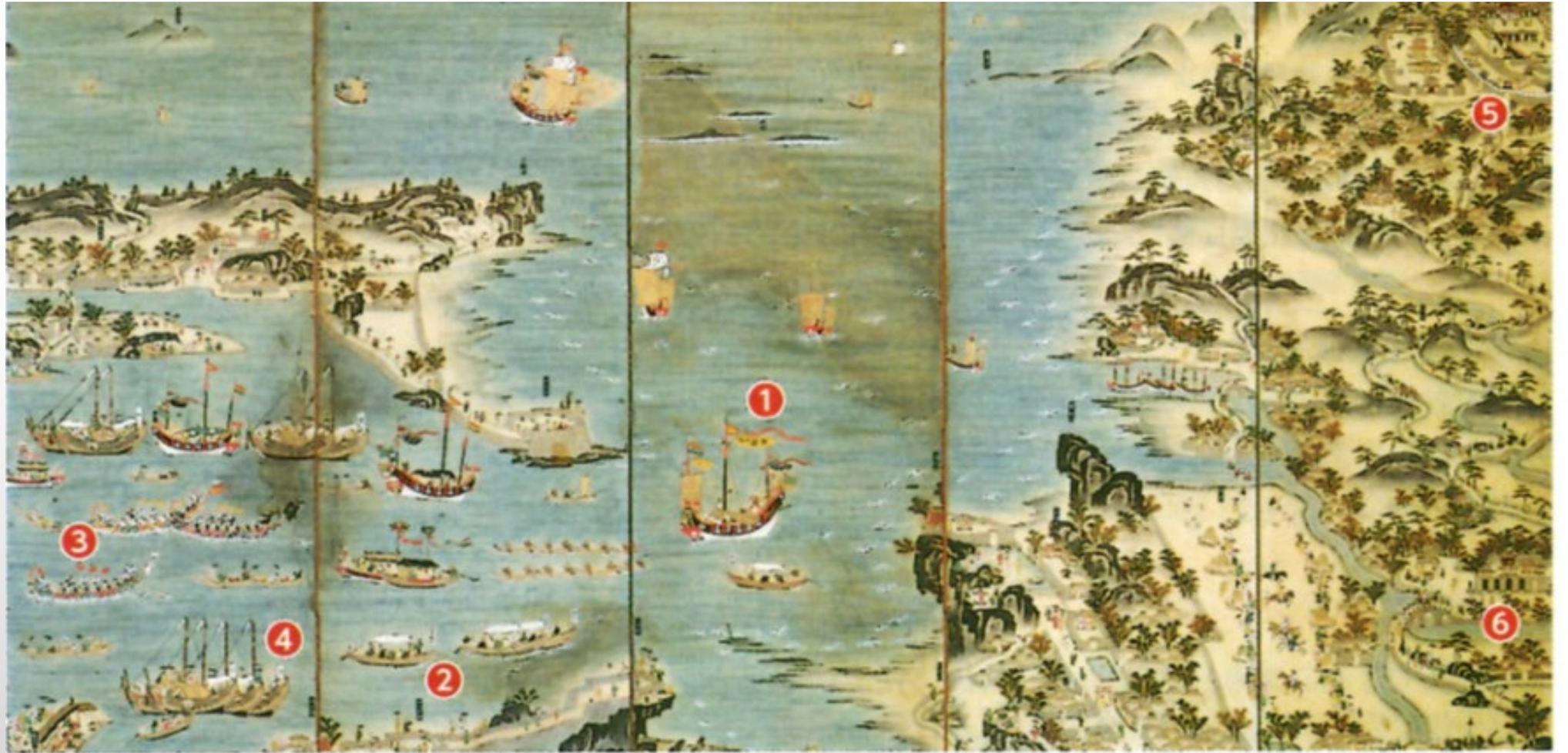


新・日本の近代史（第6回）

琉球・沖縄の近代史

I、琉球王国の繁栄～大交易時代



古琉球(～17世紀)の歴史

～10世紀 貝塚時代 中国・日本本土との交易（「貝の道」）

10世紀～ 原グスク時代 農耕の開始→人口の急増

12世紀～ **グスク時代** 都市国家の分立⇒戦国時代

→三山（山北・中山・山南）時代へ

1372年 中山王察度、**明へ朝貢**（明の属国に）⇒他も追随

1429年 尚巴志による本島統一（**琉球王国成立**）

首都は浦添から首里に

※**大交易時代**の到来(14～16世紀)

→日本・朝鮮・東南アジアと明の交易の仲介を行う

大交易時代の記憶～「万国津梁の鐘」銘文

「万国津梁の鐘」(1457)銘文

琉球国は南海の恵まれた地域に立地し、朝鮮の豊かな文化を一手に集め、中国とは上あごと下あごのように密接な関係にあり、日本とは唇と歯のように親しい関係を持っている。この二つの国の中間にある琉球はまさに理想郷といえよう。

よって、琉球は諸外国に橋を架けるように船を通わせて交易をしている。

(現代語訳は「高等学校琉球沖縄史」による)



大交易時代(14~16世紀)

「大交易時代」の背景には明への「朝貢」と、明の海禁(鎖国)政策があった。



伝統的な国際秩序＝華夷秩序・朝貢冊封

華夷秩序…中国の皇帝（「中華」）を頂点とする周辺民族（「夷狄」）との間の階層的な国際関係。

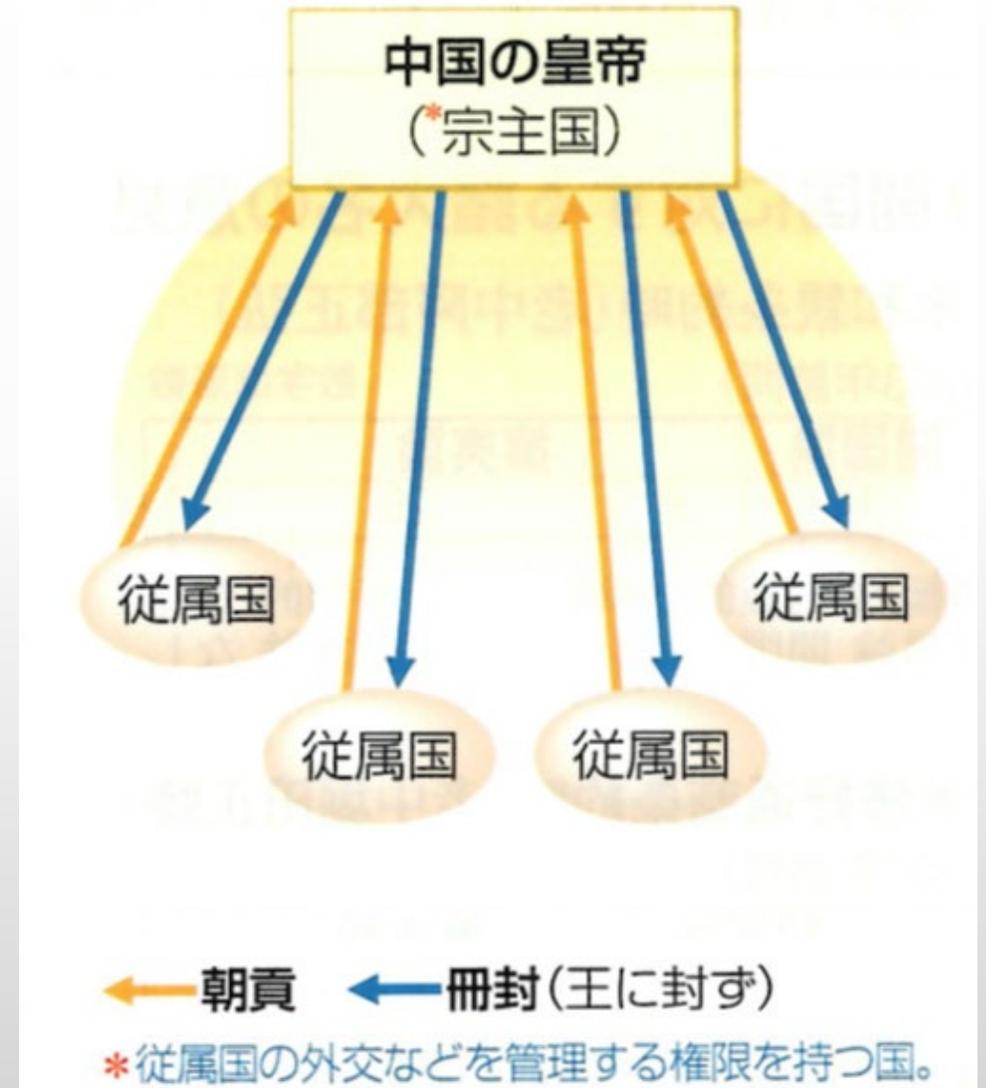
◎ 属国（朝貢・冊封関係）

- ・朝貢…皇帝への貢物を贈る
- ・冊封…皇帝が支配者と認める地位（「王」など）と曆を与える

→ 中国の威光と文化の移入、
実態としての貿易

→ 中国は内治にも、外交にも介入し

ない



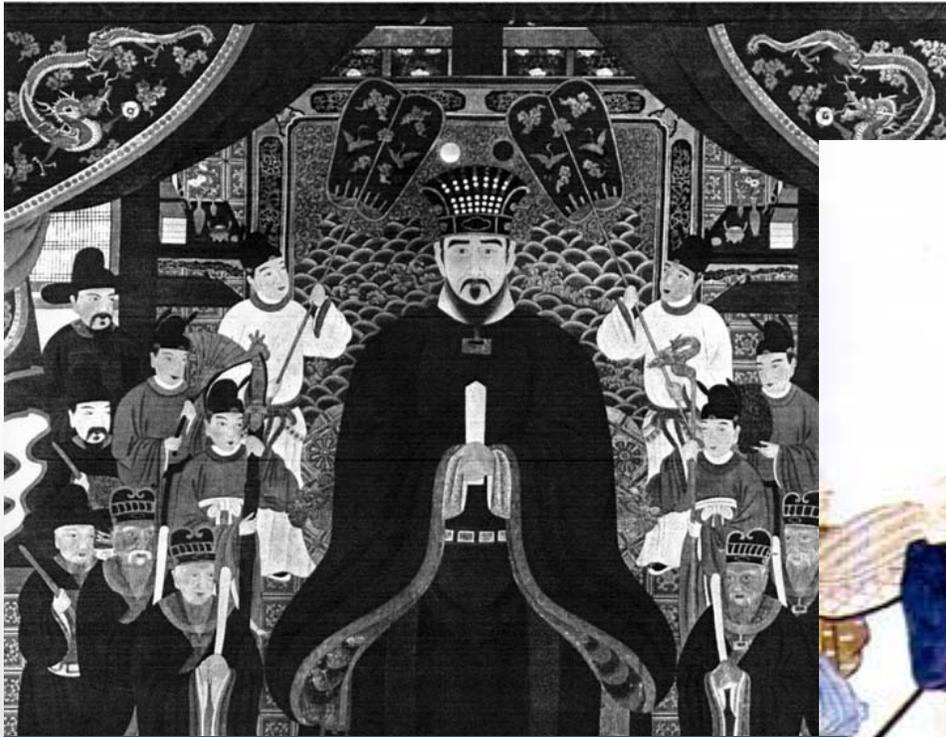
中国王朝への服属～進貢使と冊封使

進貢使…明・清皇帝への朝貢を行うべく、貢ぎ物をもって派遣される使節



冊封使…中国皇帝の勅を奉じて使
いとして派遣され、属国の国王に
封爵を授ける使節。

II、薩摩侵攻～日中両属下の琉球王国



尚寧王（位1589 - 1620）



江戸上りの様子

第二次尚氏王朝～日中両属状態に

1469 尚円、第二尚氏王朝を樹立

明の海禁緩和・南蛮貿易開始・発展により交易は低調に

16世紀末 秀吉による服属・軍資金要求⇒屈服

1609 島津家による琉球侵攻＝薩摩の属国とされる

中国(明・清)皇帝と、薩摩(日本)との両属つづく

1867 ~8 幕府の崩壊⇒明治新政府の成立

1872 琉球藩の設置

1879 廃琉置県(「琉球処分」)＝「日本」への強制編入

島津氏の琉球侵攻(1609)と薩摩の支配

1609 薩摩の琉球侵攻

- 薩摩、80隻三千の兵で侵攻
- 尚寧王を捕らえ、家康に引見させる
- 奄美を奪い、琉球の領有権を得る。
- =家臣として、**年貢納入**を命じる
- =起請文の提出と「掟」の承認

薩摩の支配

- ・薩摩仮屋(在番奉行)を設置
- 政治や中国貿易を監督
- 年貢納入
- 慶賀使と謝恩使の派遣など



武器を回収⇒琉球空手の発展
中国側に、薩摩支配を隠す
本土風の風俗や名前を禁止?
例：前田⇒真栄田

江戸幕府への朝貢～慶賀使と謝恩使

江戸上り…琉球王国の使節が江戸に派遣される。

琉球王国が、幕府⇒琉球の属国であることをアピール

- ・ **謝恩使**…琉球国王即位の際に派遣される
- ・ **慶賀使**…幕府將軍襲職の際に派遣される

- ・ 幕府…「異国」からの朝貢使節として扱い「小中華」的権威であることをアピール（「幕藩体制内の異国」）
→ **朝鮮通信使・オランダ江戸参府も同様の意味を持つ**
- ・ 薩摩…他藩と異なる特別な存在であることをアピール

江戸城へ登城する琉球使節(1710年)

日中両属下の琉球王国の位置づけ

- ① 琉球王国…多くの点で自主的な政治を実施する「自治政権」
制約を受けつつも外交権や内政権を保持＝独立国？
- ② 清…皇帝の権威に服し冊封・朝貢関係下にある「属国」
朝貢使節をおくり、冊封使を派遣し王に任命する
「曆」＝中国の年号を使用
- ③ 薩摩…幕藩体制下の大名の知行下にある「付庸国」
起請文の提出・薩摩仮屋（在番奉行）の支配・年貢納入
対清貿易の利益（+情報）獲得⇒次第に赤字に
- ④ 幕府…「小中華」帝国下の「属国」 慶賀使・謝恩使派遣

東アジアの伝統的国際秩序＝華夷秩序

清における華夷秩序

中央（皇帝→）

地方＝直轄領＝官僚支配

藩部＝理藩院→族長支配

・モンゴル・チベットなど遊牧系など

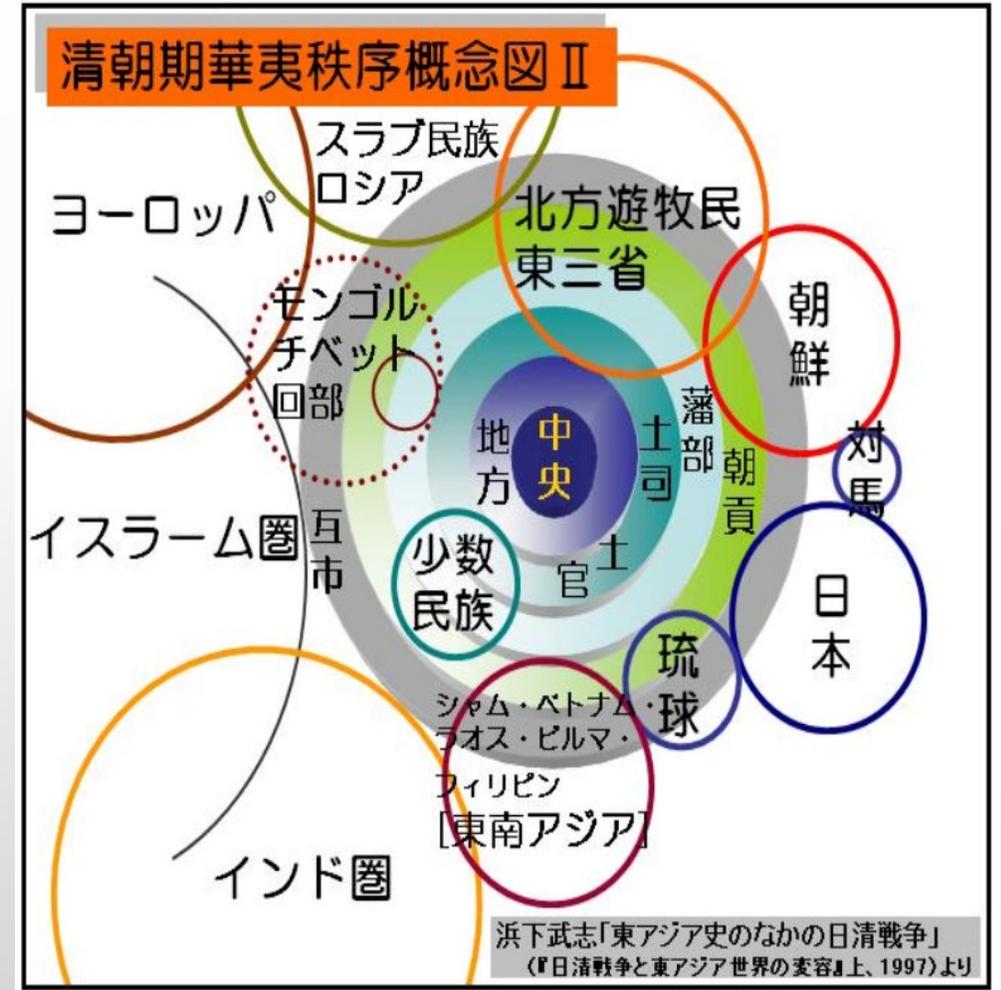
属国＝国王などに任命・実質的に独立

・朝鮮・琉球・ベトナムなど

互市＝外交を伴わない形の交易関係

・欧米諸国…広州を開港場とする

・日本…長崎での交易



琉球王国の社会と政治～上級「士族」の支配

- 人口の1/4が士族(サムレー)身分
=家譜が役所に承認された身分、免税権
(武士=戦士ではない。)
- 王族や門閥が高位を独占・試験も形式的
⇒上級士族による「頑迷固陋」の政治つづく
- 「士族」の大部分は貧困層
=商業や芸術・細工・芸能、調理、開拓民
→試験に合格しても無給状態が続く。
⇒大量の貧しい「士族」=不満の高まり



家譜 王府公認をしめす「首里之印」がある
(那覇市歴史博物館提供)

琉球王国の社会と政治～貧農などに負担集中

士族以外=「百姓」が人口の3/4を占める

・「田舎百姓」

上級の「士」とむすぶ一部の地方役人

大多数の貧農=重い負担が集中

転居や履き物、傘も禁止、

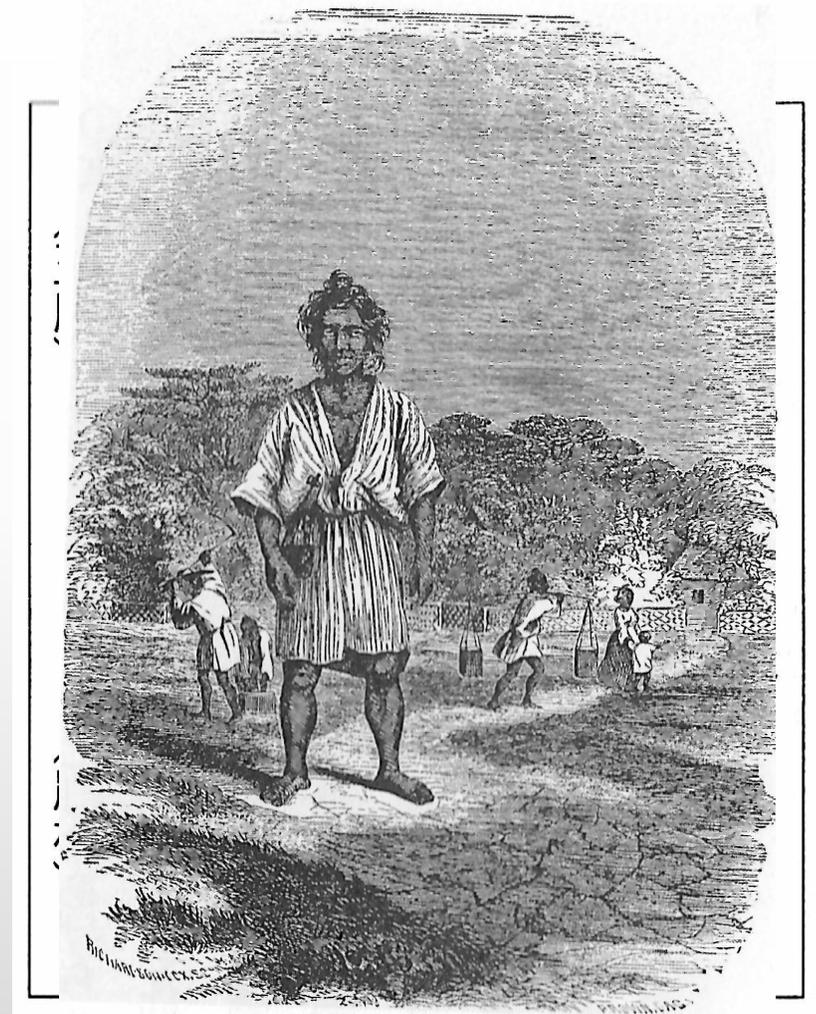
数十年に一度の耕地の「割替」

⇒改善の施策はとられない

・「町百姓」=商工業者・裕福・税免除

琉球王国…苛政と社会の混迷+薩摩の収奪

→守るべき「民族」のシンボルなのか？



ペリー一行が見た琉球の百姓

Ⅲ、19世紀後半の東アジア～華夷秩序の解体

19世紀前期…清を頂点とする華夷秩序



19世紀中期…欧米列強の東アジア進出

1840～42アヘン戦争・1856～60アロー戦争

1854 日米和親条約・1854 琉米修好条約

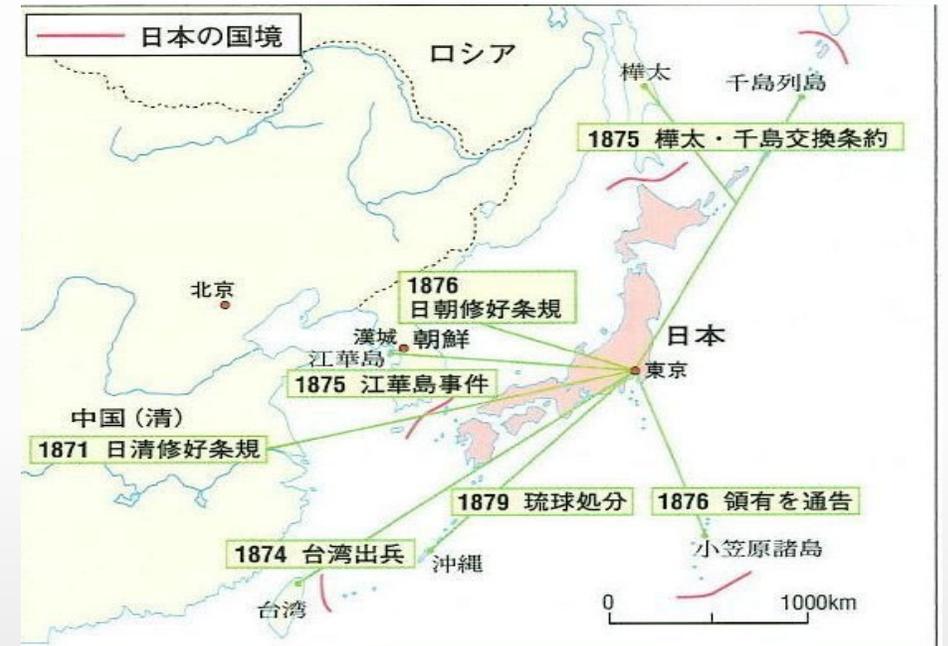
1858 日米修好通商条約(安政の五カ国条約)

→華夷秩序と主権国家体制の併存

1868 明治維新＝主権国家体制を採用

→国境の画定をすすめる。

琉球王国の扱いが問題となる



蝦夷地(北海道)開拓の本格化
1875ロシアと千島樺太交換条約
1876 小笠原諸島の領有を宣言

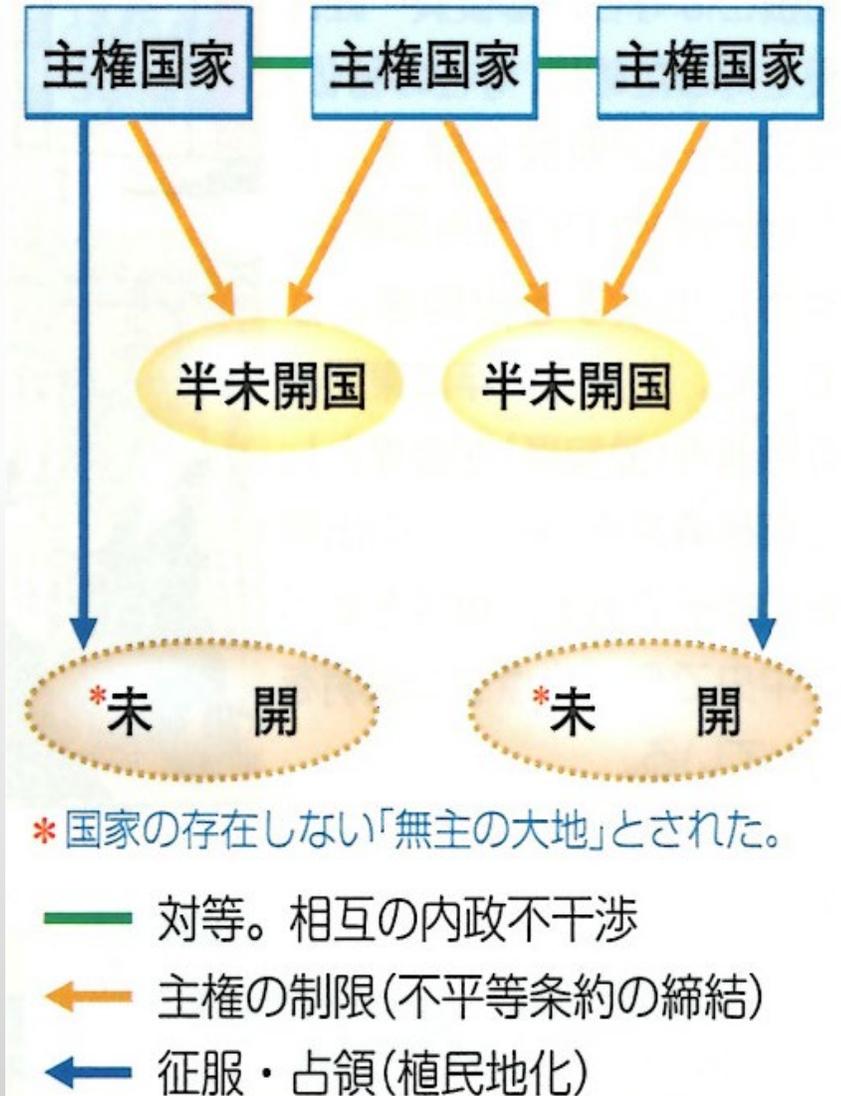
主権国家(万国公法)体制の登場

主権国家 (16～17世紀に成立)

① **明確な国境**、②国民、③他から介入を受けない統治権を持つ国家

主権国家体制 (1648成立)

- ① 対等な主権国家が相互承認・共存
すべてが欧米キリスト教「文明」国
- ② 生命・財産・自由を保障しうる十分の法をもたない国 = 「**半未開国**」
⇒ **不平等条約の対象**
- ③ 国家の存在を認めない「**未開**」の地
⇒ 「無主の地」 = **植民地の対象**



琉球王国を「日本」領にするための課題

近代主権国家の基礎

=国境・国民・排他的統治権

- **国境線の画定** = 日本の「内と外」を定める
- 属人主義から属地主義（明確な国境線）

琉球王国を組み込むためには

- (1) 王国が属国であることを再確認する
- (2) 列強の承認と王国の外交権剥奪条約破棄
- (3) 清との宗属関係の解消・朝貢冊封の中止
- (4) 清による宗属関係の解消承認



【明治初期の外交と国境の画定】

Ⅲ、廃琉置県(琉球処分)



明治維新の慶賀使一行



首里城正門に立つ日本軍兵士

琉球・沖縄の近代史(1)

1853 ペリーの沖縄・浦賀来航 (→1854琉米条約など)

1867 幕府の崩壊⇒明治新政府の成立

1872 琉球藩の設置

1879 廃琉置県(「琉球処分」) = 「日本」への強制編入

清国の抗議、グラント来日 = 分島案を提示

1892 人頭税廃止運動起こる

1894~5 日清戦争(王国回復運動の挫折)

1895 公会運動

1898 土地整理(地租改正)の本格化

琉球藩の設置(1872)

1871年 廃藩置県

→琉球王国は鹿児島県の支配下に

1872 新政府、琉球王国の使節の派遣を要求

<新政府の指示>

- ① **琉球藩の設置**・国王を藩王(華族の一員)に
→「日本の属国」として位置づける
- ② 列強との条約文の提出を求める
→ **外交権を認めず、日本外務省が獲得**
- ③ 「王国の政体は永遠に保証する」(副島外務卿)
→ 冊封に留めようとした?



琉球王国から派遣された使節
伊江王子朝直・宜野湾親方朝保ら

日清間の外交関係樹立＝日清修好条規(1871)

清(李鴻章ら)からの提案

- ①列強とは異なる**平等な近代的国際関係樹立**をめざす
- ②**東アジアにおける連帯**を期待
- ③**日本の侵略的性格への危惧**(倭寇の記憶)
→とくに**琉球王国・朝鮮への進出を懸念**

日本 ④朝鮮の宗主国・清と対等に
→朝鮮に対する優位を実現しようとする

<内容>

- ①互いに治外法権・協定関税を認めあうことでの対等平等
- ②「両国所属の邦土、ややも侵越あるべからず」(1条)
→対象を明示せず

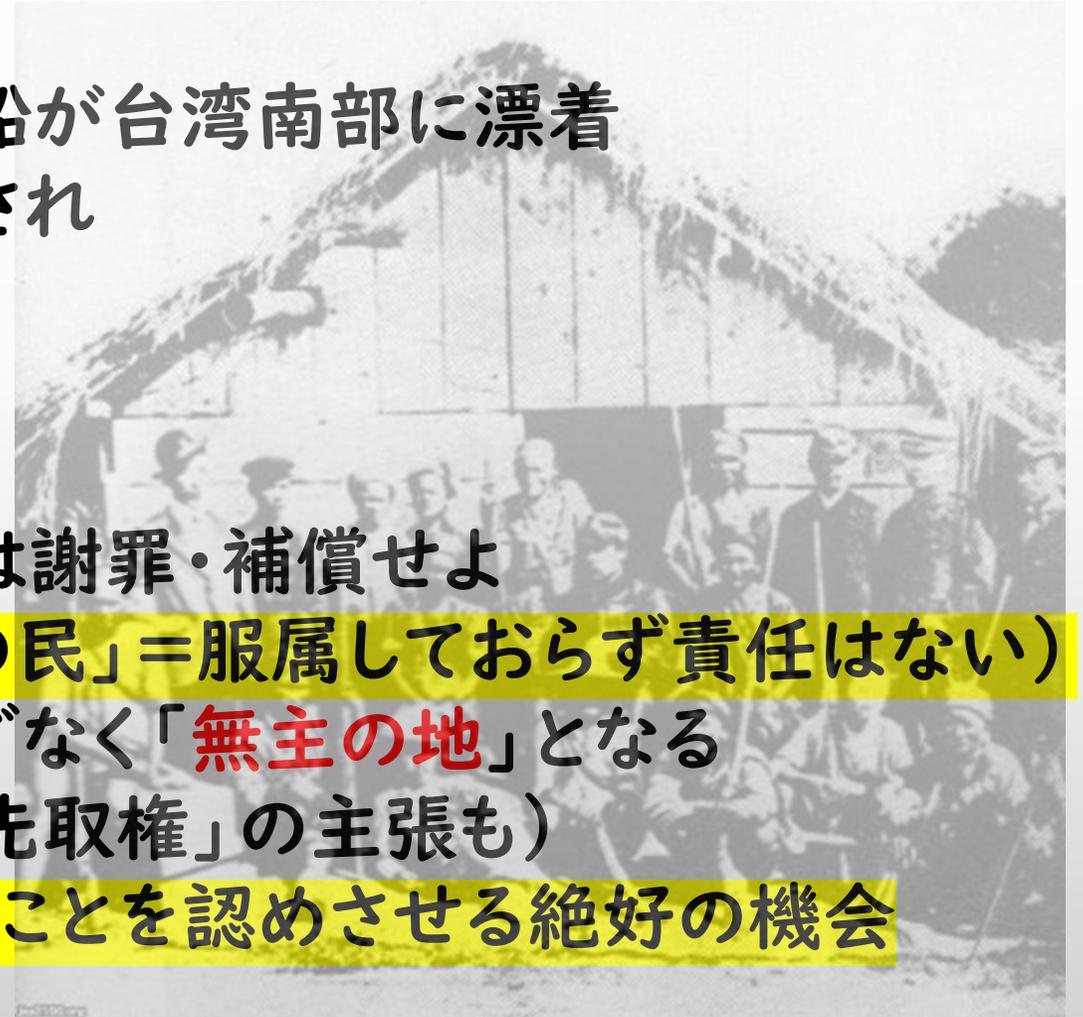
日本最初の海外出兵＝台湾出兵(1)

<宮古島民遭難事件>

1871年首里から宮古島におかう船が台湾南部に漂着
→66名中54名が先住民に殺害され
12名は清に保護され帰国

<日本側の主張・清の主張>

- ①「琉球王国」民は「日本人」＝清は謝罪・補償せよ
←②清・先住民は「化外の民」＝服属しておらず責任はない
- ③「化外の民」が住む台湾は清領でなく「無主の地」となる
＝日本の責任で懲罰できる・（「先取権」の主張も）
- ④清に「琉球王国」＝日本領であることを認めさせる絶好の機会



日本最初の海外出兵＝台湾出兵(2)

<台湾出兵計画>

- ①日本政府、士族の不满を外に振り向ける政策として計画
(大隈らが企画→大久保も支持、**西郷従道**が責任者)
- ②アメリカ公使のすすめ

<反対の動き>

- ③列強(アメリカをふくめ)の反対
- ④木戸の反対、明治天皇延期を命令→いったん中止

<台湾出兵の実施>

- ⑤**西郷が独断で実施**(3000人が参加)・**政府は追認**
- ⑥現地(牡丹社)先住民を制圧・占領
→日本側戦死者12名、**戦病死者561名**

日本最初の海外出兵＝台湾出兵(3)

清の強い反発→日清戦争の危機に
列強も激しく非難

大久保、渡清→日清交渉の開始、イギリスなどの仲介

<結果> **清側の大幅な妥協**

①台湾は清の領土と再確認

②清は日本の行動を「義拳」とみとめ、見舞金などを支払う

→③これにより「琉球人は日本人、琉球は日本の領土」であることを
容認したと理解する

<補足>出兵に用いた艦船準備をきっかけに「三菱」は財閥の道を歩む
清はこのときの屈辱感をバネに海軍建造計画をすすめる

「琉球処分」の本格化～清との断絶を要求～

1875 日本政府、王国政府に5点を命令

①清国との冊封・朝貢関係の断絶、

②日本の暦の使用

→清との属国関係の解消を要求

③制度を他の府県同様に変更すること

④改革担当者を派遣すること

→琉球王国の内地化

⑤軍隊の琉球駐屯と、軍事施設設置

→日本による「軍事占領」という面も



内務省大丞 松田道之
(鳥取藩出身)

「琉球処分」の本格化～琉球王国の反発と抵抗

- ◎王国側の対応＝「『小国』としての伝統的な対応」
 - ・政府への陳情 「日・清は両親であり、どちらか一方にはできない」
 - ・「引き延ばし」策 「清とは交渉中」「国王の病気」
 - ・清への働きかけ＝「脱清救国運動」の展開＝援助・介入を要請
- ◎清の対応→日本政府への抗議（清国公使は軍艦派遣を要請）
他の懸案もあり、動きは鈍い
- ◎日本側の動き
 - 清との通交を禁止（朝貢できず、密出国）
 - 軍事基地の建設などを進める
- ◎王国内の対応の分裂＝頑固党と開化党
→「脱清救国運動」の展開＝清の援助を要請

廃琉置県（琉球処分）強行（1879）

1877年西南戦争＝士族反乱の終焉

1879年1月内務大書記官松田道之の訪沖

同年3月 松田処分官、軍隊（熊本鎮台兵約400人）

・警察（160人）・官僚（40人）とともに再度、訪沖

以下を伝達・命令

①琉球藩廃止・沖縄県設置

②尚泰の東京移送

③王府の廃止（首里城の明け渡し）

④県庁への機能移転

→琉球王国（琉球藩）の終焉

・沖縄県の誕生



琉球国王 尚泰

「ヤマト」の支配～士族の抵抗と屈服

王国の首都機能を県庁に引き継ぐ

→ 首里城明け渡し

→ 他府県出身者中心の県政運営に

=これまでの王国の役人は失職

士族などによるサボタージュ

「日本側の命令には従わない」との血判

日本側の協力した役人をリンチ殺人

年貢引き渡しの拒否

→ 「二重権力状態」に

県庁…関係者を一斉逮捕、拷問で服従を強要。



首里城正門に立つ日本軍兵士

「ヤマト」の支配～「旧慣温存」

当初の沖縄統治＝「旧慣温存」

それまでの王国の統治のやり方を引き継ぐ

<背景>

- ①王族や上級士族など旧支配層の協力が必要
- ②清国の影響力拡大を懸念

<結果>

- ①旧支配層のサボタージュなどは弾圧しつつ、
秩禄などでは優遇（→秩禄処分は1910実行）
- ②下級士族の冷遇…小作農民や馬車引きなどに
- ③民衆への「苛政」は変わらず
→日本の統治への失望→上杉知事の意見書＝罷免される
- ④人頭税廃止運動（宮古島）の発生→「旧慣温存」の見直しへ

「ヤマト」の支配～「旧慣温存」への疑問

初代知事・鍋島直彬

- ①学校設置による日本語教育→不人気
- ②産業振興

二代目・上杉茂憲

- ①県費留学生の派遣
- ②民衆の生活の劣悪さを知り、調査
→中央に改革を進言、罷免される

人頭税廃止運動 (1892～)

宮古島の農民らが上京、請願→廃止 (1895)



上杉県令によって1882年に派遣された第1回県費留学生
前列左より太田朝敷 (15歳), 岸本賀昌 (15歳),
高嶺朝教 (15歳), 後列が山口全述 (18歳), 謝花昇
(18歳), (那覇市歴史博物館提供)

脱清救国運動と琉球分割案

「脱清救国運動」の展開

清政府に働きかけ、王国を復活めざす

清→「琉球処分」のやり方を抗議

→ Grant 前米大統領に斡旋を依頼

→ **Grant 案の提示**

日本…修好条規の不平等条約化を条件に承諾

清 …いったん承諾

在清琉球人・林世功の自決などで保留

日清戦争・下関条約により無効となる



Grant 案

本島などは日本

宮古・八重山諸島は中国

領 (→そこに琉球王国を

復活させる)

V、沖縄の「ヤマト化」の進行



旧式
旧式の製糖所

報社)

南洋群島パラオでの祭礼



琉球・沖縄の近代史

- 1879 廃琉置県（「琉球処分」）＝「日本」への強制編入
- 1892 人頭税廃止運動起こる
- 1894～5 日清戦争
- 1895 公会運動
- 1898 土地整理（地租改正）の本格化
- 1899 海外移民の開始（ハワイ・オアフ島へ）
- 1920 砂糖相場急落⇒ソテツ地獄の発生に
- 1921 南洋興発設立⇒南洋群島への移民（出稼ぎ）の開始
- 1929 海外移民、最高値に
- 1939 標準語励行県民運動開始⇒1940方言論争へ
- 1944 10・10空襲
- 1945.3.26 沖縄戦開始 6.23組織的戦闘終了 9.7降伏調印

「日清戦争」～広義の「琉球処分」へ

- ① 日清戦争（1894～5）の発生⇒**県民の分裂**
 - ・「頑固派」…清海軍の来航を期待、清国の「戦勝祈願」
 - ・中学生たち…日本軍への義勇軍を結成＝射撃練習など→清の敗北＝琉球王国の復活は不可能・清への配慮不要に
→「頑固派」＝上層士族の影響力低下＝**「旧慣温存」中止へ**

- ② 公会運動＝「開化派」中心、王家の県知事就任を要望
→挫折・王朝復帰は不可能に

- ③ **本格的な「日本化」（広義の「琉球処分」）の開始**
→遅れてきた「明治維新」?!の開始

本格的な「ヤマト」化の開始

本格的な「ヤマト」化（広義の「琉球処分」の進行）

①・**土地整理（地租改正）**の開始（1899～03）

農民の土地所有承認、士族へも課税

→サトウキビ栽培の拡大

②1898 地方制度改革開始（～1920）

内地とは大きく異なる内容

③1898 徴兵令の施行

→大量の忌避者（指切断・清に亡命）

④1912 参政権の実現

→1919 本土並みの制度に

⑤1910～ 「士」族解体（秩禄処分）



サトウキビ運搬作業をする沖縄県人(1916年)

提供／宜野湾市教育委員会文化課

大不況＝ソテツ地獄の発生

土地整理＝私有地の獲得（大部分が零細）
大戦景気による砂糖の高騰

→ 島内におけるサトウキビ生産の拡大

大戦後の不況＋台湾での大規模栽培拡大
→ 砂糖の市場価格が大暴落・不況に

不作と慢性的不況＝「ソテツ地獄」の発生

→ 食糧難から毒を含むソテツを食べざるを得ない状況に



欠食児童・長欠児童⇒子守り奉公・「糸満売り」「辻売り」の増加
都市部、さらに「内地」への出稼ぎ、海外への移住の急増

ソテツにはサイカシンという有毒成分が含まれており、水洗いや調理が不十分な場合は、腹痛・嘔吐・痙攣・意識不明に陥り、死にいたることもある。

にもかかわらず琉球時代から非常食として食べられ、栽培が奨励されていた。

出稼ぎ・移住＝「リトル沖縄」の誕生

「ソテツ地獄」→内地への出稼ぎが急増・仕送りに依存
短期・出稼ぎ型⇒しだいに定住化

約2万人(男9000人、女11000人/1925(T14)年)

大阪8500人、神奈川2800人、福岡1000人

⇒不熟練工や日雇い、化学・雑工業・**紡績**などでの低賃金労働が中心

西表島・大東諸島⇒「苛酷」をとおりこして「悲惨」

出稼ぎ労働者の担い手…**「ウチナーグチの世界で生きてきた人」**

⇒不当な差別・偏見

就職差別(「朝鮮人・琉球人お断り」、他府県出身者の半分の賃金も

⇒背景にあることば・名前・風俗習慣、他府県人の認識不足

→県出身者の集住(リトル沖縄の成立)

「移民県」沖縄

ソテツ地獄をきっかけに海外移民も急増1923~31 22,601人

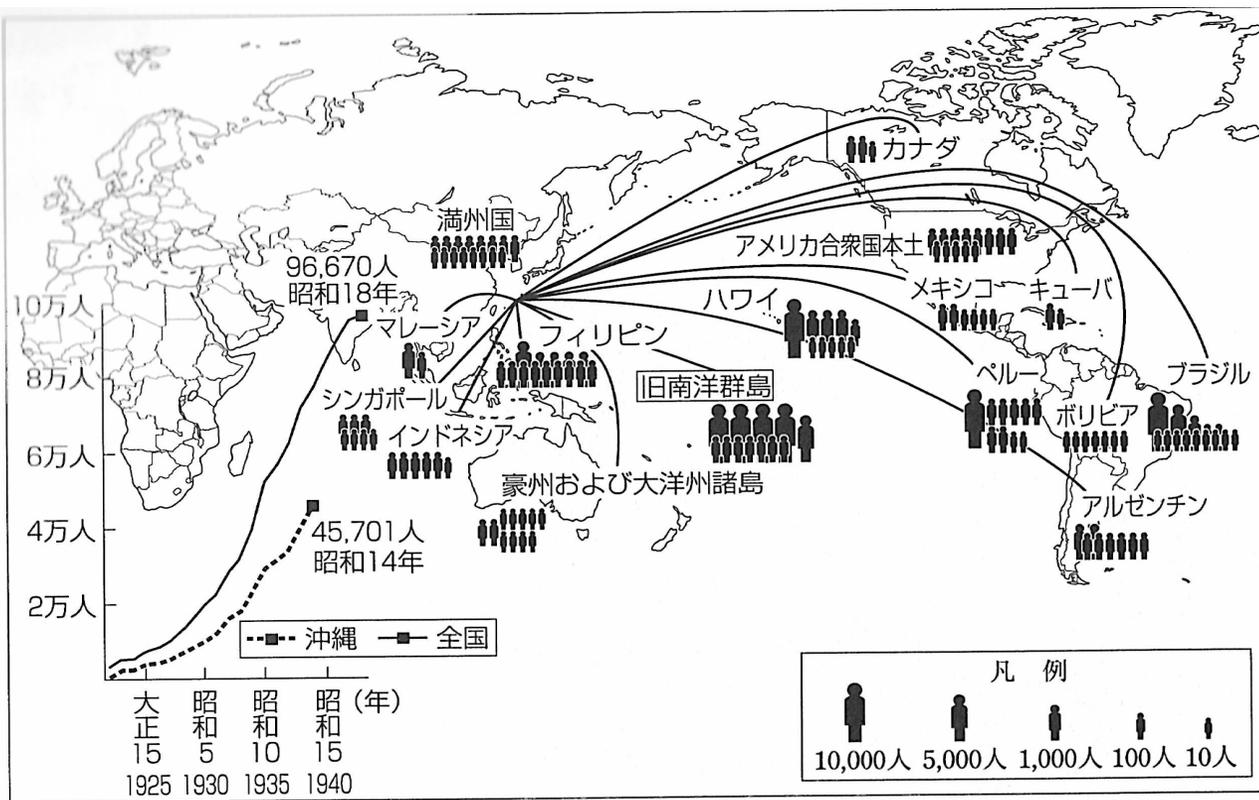


渡航証明書

明治時代に発行された旅券(パスポート)です。農業従事者のため、4ヶ年間南米ペルーへの渡航が認められています。



▲出稼ぎや移民を見送る人々(那覇港)



沖縄県移民の分布図(1940)と増加
 注「南洋群島約5万人、ブラジル1.6万人、ハワイ1.4万人」
 実際には南洋群島に次いで、フィリピン35%、ペルー23%、ブラジル17% (「沖縄県の百年」)

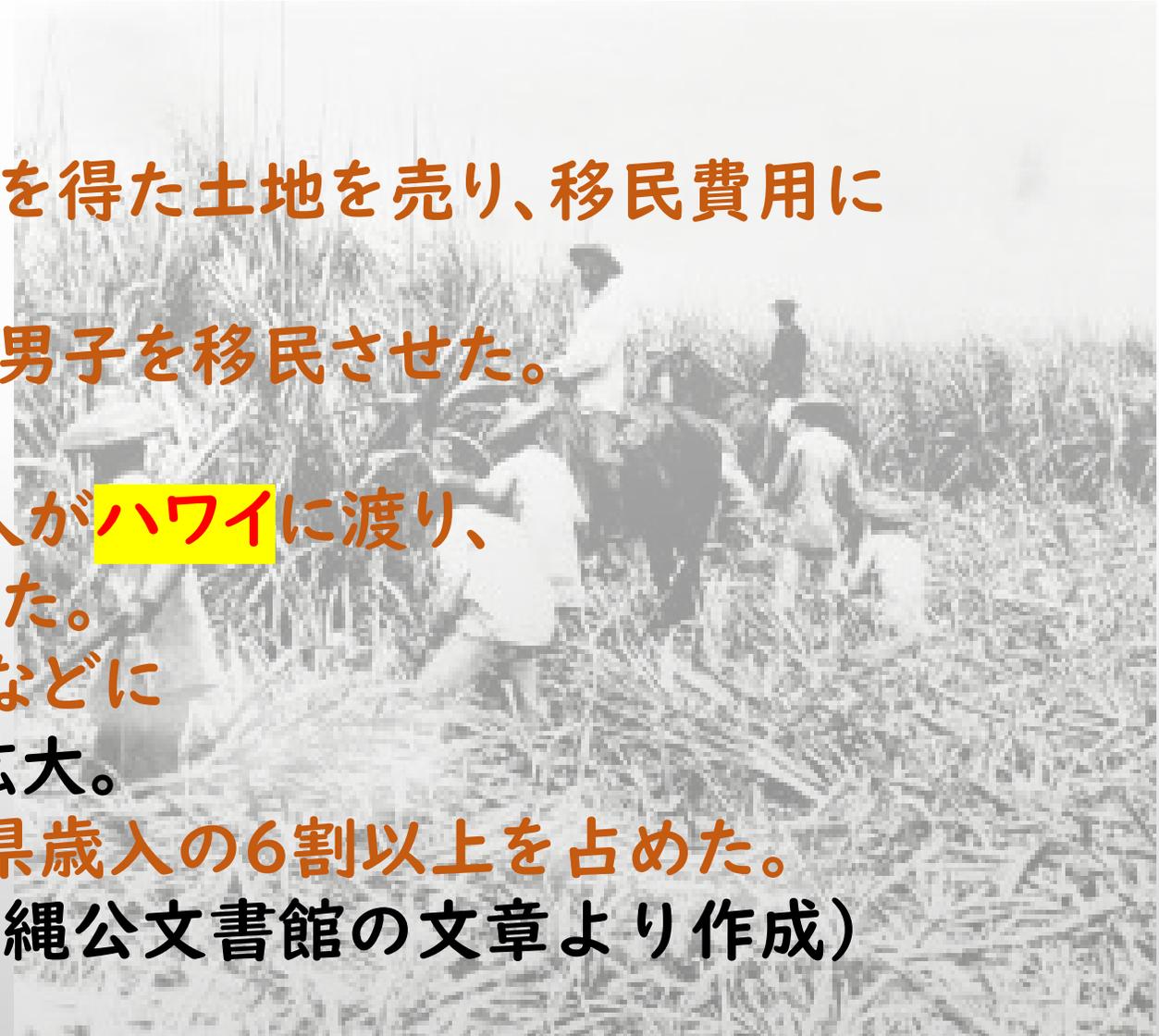
海外移民の開始

海外移民のきっかけ

- ①1899年の土地整理で、私有権を得た土地を売り、移民費用にあてることが可能となった。
- ②1898年施行の徴兵令をきらい男子を移民させた。

最初の海外移民

- ・1899年當山久三の斡旋で26人が**ハワイ**に渡り、サトウキビ耕地の契約移民となった。
⇒のち養豚業やレストラン経営などに
- ・その後、移民先は南米、北米へと拡大。
海外移民の送金総額は一時は県歳入の6割以上を占めた。
(沖縄公文書館の文章より作成)



ソテツ地獄をきっかけに海外移民が急増

・南米移民…政府がブラジル渡航費を全額負担

砂糖・コーヒー農園の農業労働者
⇒雑貨・飲食・理髪などへ進出

1/3が沖縄出身者

・南方移民

フィリピン(ミンダナオ島ダバオ中心)

毎年1000人超、52%が沖縄出身

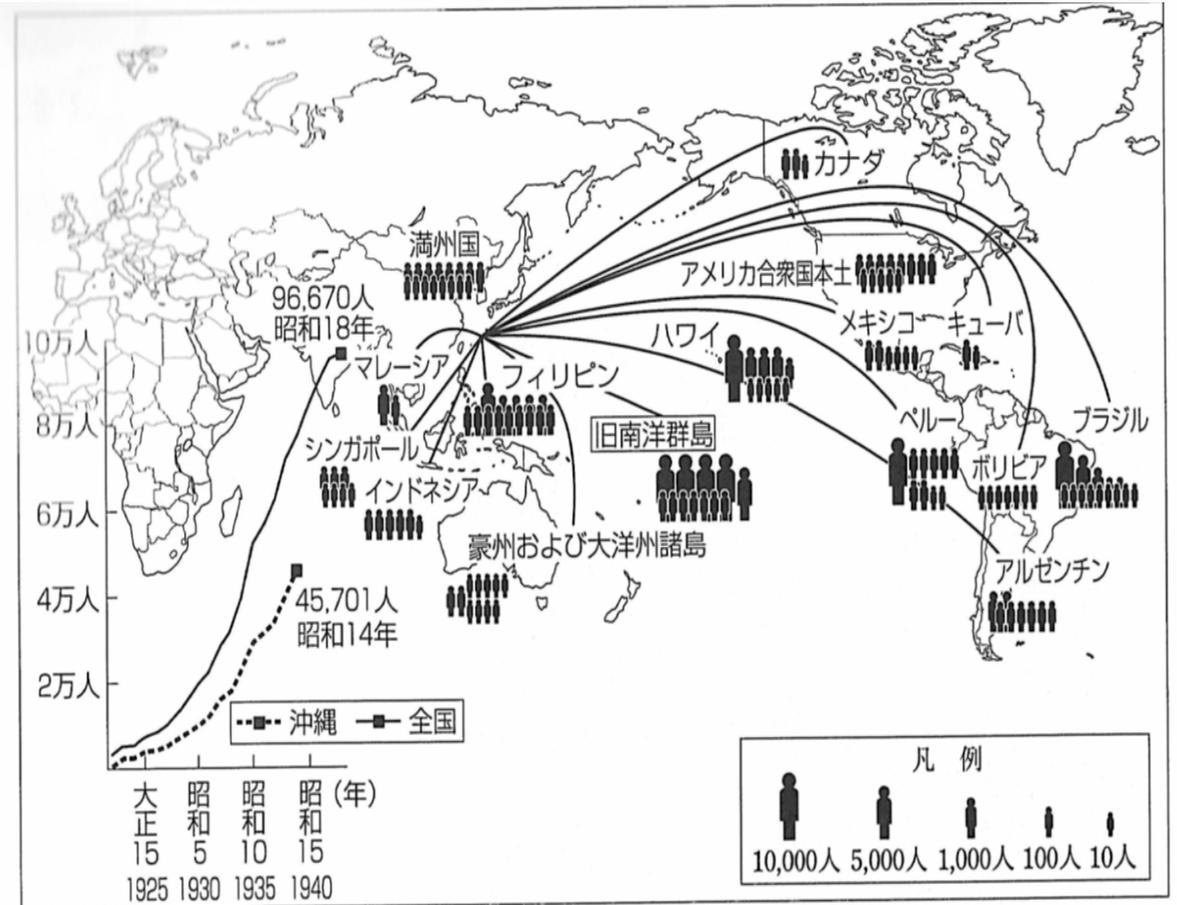
マニラ麻・蔬菜・果樹・コーヒー

・カカオ・養豚・養鶏

シンガポール、ジャワ・スマトラ

・セレベス・スマトラなどにも

・南洋群島



沖縄県移民の分布図(昭和15年<1940>) 旧南洋群島に約5万人, ブラジルに約1万6000人, ハワイに約1万4000人となっている。『沖縄県史』7ほかより作成。

「南洋群島」への移民

南興精神綱領

一皇室を敬ひ國體を重んずべし

一松江社長の開拓精神を永遠に傳ふべし

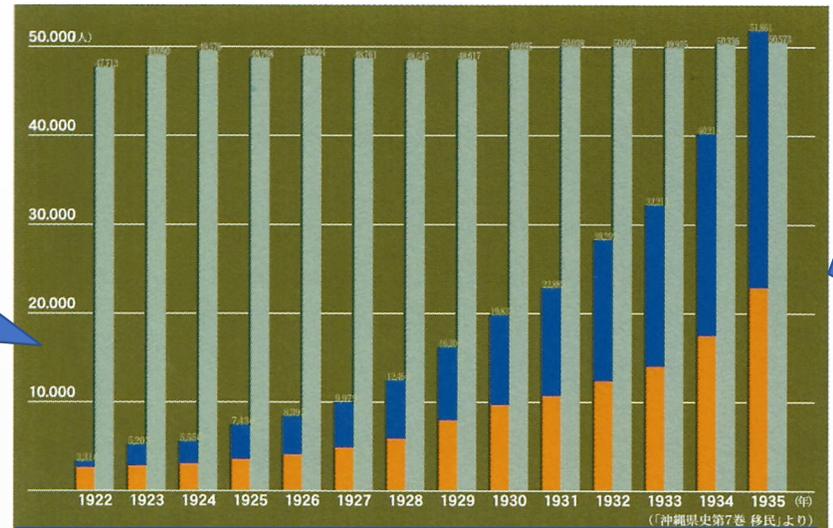
一純忠至誠の大和魂を以て南洋産業の興隆に力むべし

一家族主義を基調とし同心協力すべし

一質實剛健堅忍不拔以て勤勞すべし

1919南洋群島「領有」
1921南洋興発設立

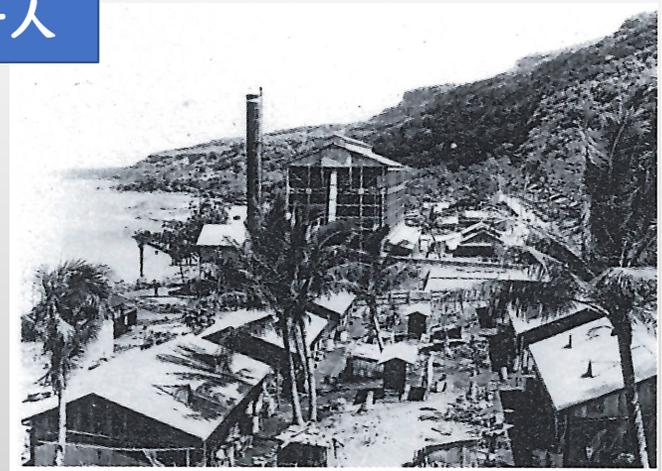
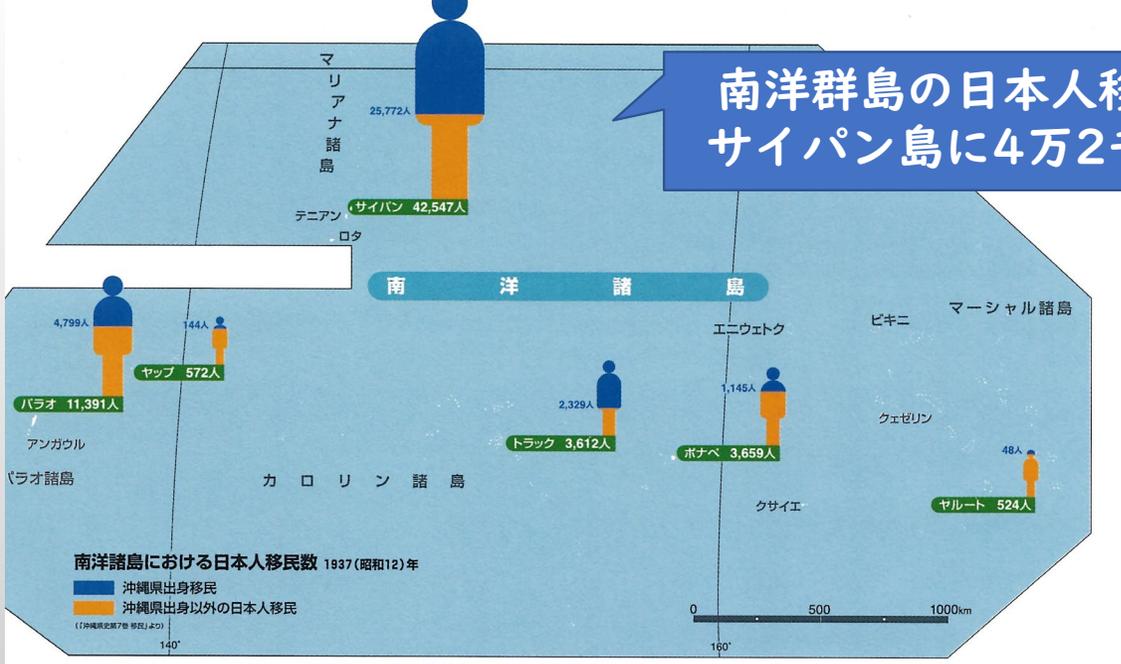
増加していく移民たち
1935年に5万人を超える



青色が沖縄出身者

南洋群島における年次別現住人口

南洋群島の日本人移民
サイパン島に4万2千人



リン鉱工場・ロタ島
Phosphate mine and factory, Rota Island



ソンスン市街地・ロタ島

南洋群島への「移民」

1919ベルサイユ条約…赤道以北の南洋群島、委任統治領に

1921南洋興発(半官半民)設立…主に沖縄から移民を募る方針

①ソテツ地獄⇒困窮と過剰人口 ②移民の伝統 ③サトウキビ栽培

1923年2000人の移民が渡航⇒以後、急増 半数以上が沖縄出身

④「沖縄の延長」=三線・沖縄芝居の常設館

⇒渡航ビザ不要、日本人学校・気候や植生の類似性・言葉など



多くがアジア太平洋戦争の激戦地に

とくにサイパン島 約1万人の一般住民が戦争に巻き込まれて死亡

風俗改良運動・普通語普及運動へ

①「沖縄教育会」結成…「忠愛の士気」「国家的思想」の浸透

②風俗改良運動

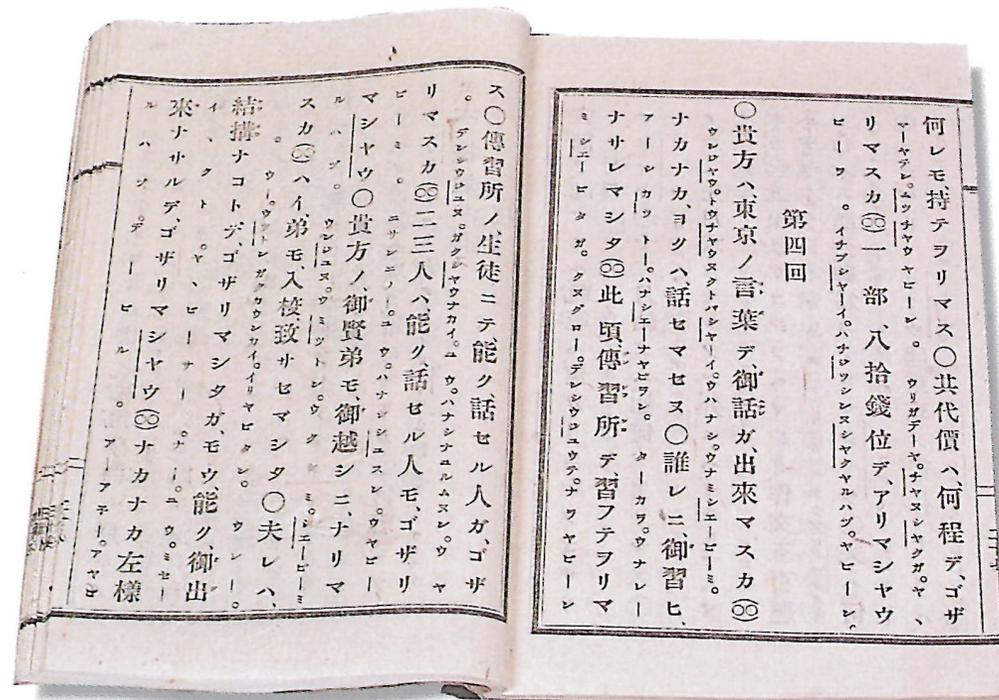
文化風俗習慣の「内地化」

- ・断髪・服装改革、入れ墨禁止、
- ・三線・琉歌の禁止、・普通語普及

③背景に琉球の文化・風俗さらには
県民自身を「差別・野蛮視」する風潮
⇒ 人類館事件(1902)



方言撲滅運動・改姓運動などへ
=沖縄の文化・伝統の否定に



「沖縄対話」
明治初めの《沖縄対話》(1880)は
標準語習得用の対訳式教科書

人類館事件

1903年大阪に「学術人類館」と称する見世物小屋が設置され、「アイヌ」「台湾生蕃」「朝鮮人」「ジャワ人」「トルコ人」「アフリカ人」などとともに「琉球人」の遊女2人が「展示」された。韓国や中国留学生から抗議の声があがり、琉球新報も中止をもとめる。

「特に台湾の生蕃北海のアイヌ等と共に本島人を撰みたるは是れ我を生蕃アイヌ視したるものなり」との屈折した人種観をみせる。



人類館で見世物にされた人びと
提供／「絵はがきにみる沖縄」(琉球新報社)

方言撲滅運動～「日本人」として生きる

① 出稼ぎ・移住の急増、戦時体制からくる皇民化政策・同化圧力の高まり

・日本人として、日本人らしく生きることを求める動きの強まり。

・背景にある他府県住民からの差別・偏見

② 「方言撲滅運動」

「一家そろって標準語」の標語、「方言札」

③ 改姓運動

仲村渠（なかんだり）→「中村」「仲村」
城「グスク」→「じょう」



琉球・沖縄の伝統か、ヤマトへの同化か ～方言論争が問うもの～

1940年柳宗悦、雑誌「民芸」誌上で
沖縄ですすめられる方言撲滅運動を強く批判
(趣旨)

- ①こうした手法は沖縄方言を見下し県民に
屈辱感を与えるのではないか、
- ②沖縄方言は日本の古語を多く含んでおり
学術的にも貴重である、
- ③他県にはこのような運動はない



県当局者や県民からの強い反発(方言論争)



柳宗悦 (1891～
1961 民芸運動
のリーダー)と
雑誌「民芸」



「民芸」1940(昭和15)年3月1日

方言論争の背景～移住と軍隊・戦時体制

- ① 出稼ぎ・移住…中心は「沖縄語（ウチナーグチ）で生きる人たち」
⇒意思疎通の困難、名前などへの違和感・差別と偏見＝他民族の扱い。
県庁の批判「ことばや習慣などで誤解や不利益を受け、
消極的で引っ込み思案にみられるではないか」
- ② 軍の論理…伝達・命令における言語、「天皇の赤子」意識の強要
- ③ 沖縄県内部における言語の不統一
↓
標準語使用など「ヤマト化」は「日本人」として生きる「必須」条件。
 - ① 沖縄の伝統や文化から距離を置き、「日本人の物語」に同化すること。
 - ② 「共通語」…言葉の壁をやぶり「日本人」の共通基盤を作ること。

伊波普猷～沖縄近代の重層的矛盾を反映

言語学者, 民俗学者, 歴史家。「**沖縄学の父**」。
古謡集『おもろさうし』を中心に, 琉球の古代史,
古語, 古俗を実証的に研究、「古琉球」などで、
その**独自の価値を強調し、その破壊に反対した。**

他方、沖縄を特殊化する見方に対し、沖縄住民とその文化が日本民族、日本文化と同根であり、その古層を示すという「**日琉同祖論**」を体系化し、「**琉球処分は奴隷解放なり**」として薩摩による異民族視・植民地政治からの解放と捉えた。

その主張は**沖縄近代の重層的矛盾を反映している**との指摘（鹿野政直）もある。

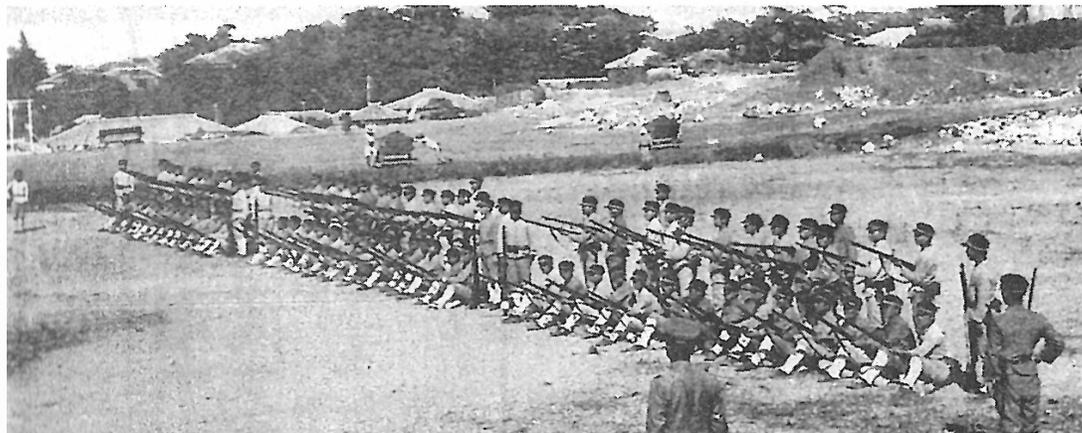


伊波普猷
(1876-1947)

戦時体制下の県民協力



出征兵士と、見送り



軍事教練を受ける県立一中生



女子青年団の精動運動



陣地構築活動に従事する女学生

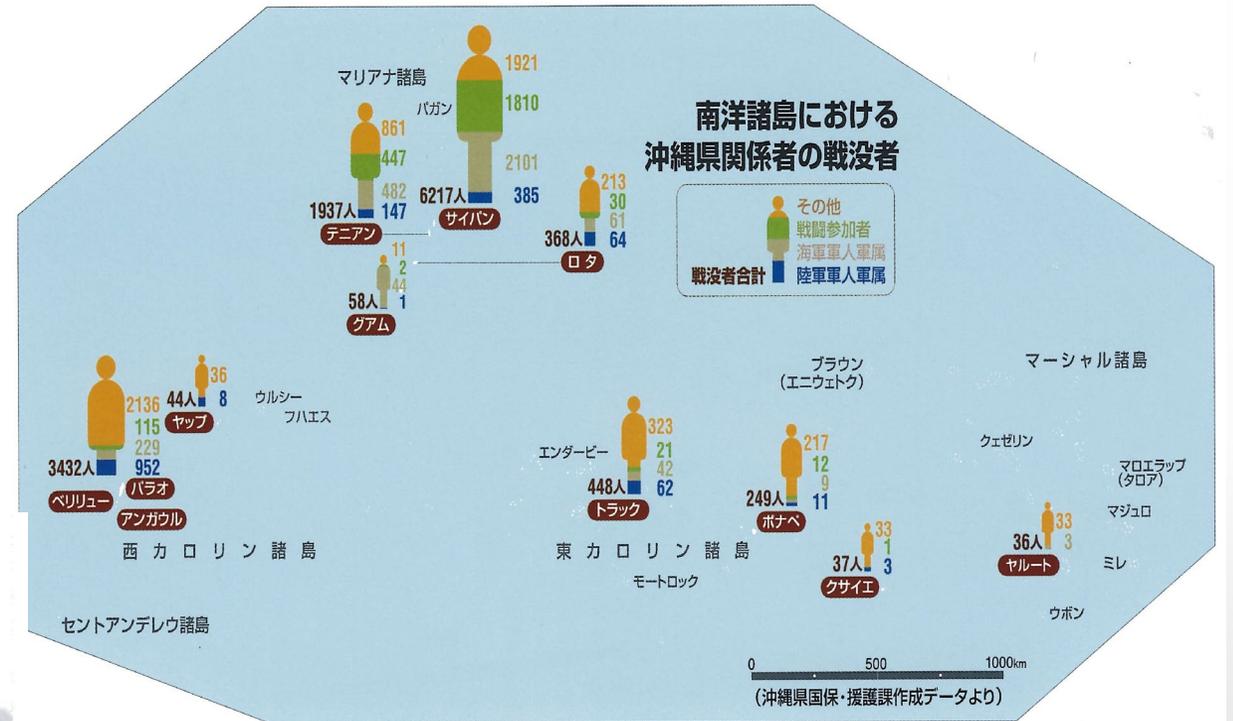
移民先・南洋諸島で～バンザイクリフの悲劇



多くの住民が身を投げたサイパン島の断崖（バンザイクリフ）



収容された民間人 1944(昭和19)年
サイパン島オレアイ海岸



沖縄の近代史～「沖縄県史」の記述から

沖縄の近代史は、おおざっぱに言えば、
沖縄が日本帝国主義に吸収・一体化されていく過程
であり、
沖縄の民衆が思想文化面で『皇民化』されていく過
程であった。
そして沖縄戦の中で一体化が頂点に達したというこ
とも出来るし、
同時に一体化の裏返しに他ならない差別と偏見が
もっとも露骨にあらわれた局面でもあった。

おわりに～戦後の沖縄

- 1945 沖縄戦⇒米軍の占領下に
- 1949 アメリカ、沖縄の長期保有を決定
- 1950 サンフランシスコ講和会議⇒沖縄を本土から分離
- 1953 米軍基地の拡張本格化「銃剣とブルドーザー」
- 1956 「島ぐるみ闘争」
- 1959 宮森小学校に米軍機墜落、死者17名、負傷者121名
- 1965 ベトナム戦争本格化、米軍人・軍属による事件頻発
- 1969 沖縄返還決定
- 1970 コザ暴動
- 1972 沖縄返還（沖縄県誕生）
- 1995 少女暴行事件⇒県民総決起集会
- 1996 普天間飛行場返還合意
- 2005 日米政府、辺野古に普天間代替基地建設で合意
- 2018 辺野古新基地建設本格化⇒反対運動激化